

明末期における天主教批判

研究生 石上 壽應

本発表では明末における天主教と仏教界との論難、特にマテオ・リッチ『天主実義』出版から、仏教僧としての初めての論駁である株宏『竹窓隨筆』「天説」発表までの経緯を、居士虞淳熙とリッチの往復書簡、そして株宏の住した杭州における天主教布教活動をたよりに考察した。

明末の本格的な天主教開教は、マテオ・リッチらが万曆九年（一五八一）に広州肇慶で布教したことに始まる。のちに各地へと広がり、同二九年には北京入城、同三一年に北京で『天主実義』を出版、同三五年には杭州で重刊、同三六年には『畸人十篇』と、天主教の教理書が次々と発表された。これに反応したのが、株宏を敬服する杭州出身居士虞淳熙である。彼は同三六年に「虞徳園銓部與利西泰先生書」において、リッチが招来した西洋自然科学には大いに魅力を感じているものの、彼の仏教批判に対しては反感を抱いており、天主教は仏教を差し置いて新たに布教する価値はない点を書簡としてリッチに送った。

対してリッチは「利先生復虞銓部書」を返信し、仏教は儒教とも相反するものであり、また仏典には矛盾も数多くあり、天主教と仏教は相容れないものであると反論する。そして天主教を弘めるべく、さらに教理書を漢訳していく意気込みを語っている。

この返信に批評を加えたのが、株宏の「答虞徳園銓部」

である。株宏はリッチの返信が代筆である可能性を指摘しているが、のちに株宏に対してリッチに仮託された反駁書があることを鑑みると、「利先生復虞銓部書」もリッチ仮託の書簡である可能性が高い。ともあれ、株宏はリッチのみならず天主教に対して、「蠢介么魔（道理をわきまえず取るに足らないもの）」という強い蔑視を表わす語で非難する。これは当時流行していた民間宗教で、株宏も嫌悪していた羅教や白蓮教に対してでさえ、「邪道」「無頼惡輩」といった語で批判されていたことを鑑みると、株宏は同三六年時点ですでに天主教をかなり忌避していたことが窺える。これほど強い蔑視をしていたにも関わらず株宏がすぐに天主教を反論せず、この批評からおおよそ七年後の同四三年に「天説」を著したのはなぜであるか。

ここに杭州における天主教布教活動が関係してくる。リッチに師事した中国天主教三柱石のうち楊廷筠・李之藻は杭州出身の進士で、ともに北京でリッチと出会い、のちに Lazarus Cattaneo や Nicolas Trigault の杭州開教の手助けをしたとされる。彼ら宣教師が正式に杭州に入ったのが同三九年、以後活発に布教が進む。もとは仏教を信仰していた楊廷筠も天主教へ帰依し、居士・民衆も天主教を信奉する者が増えていったのが同四〇年代前半にあたる。株宏は士大夫が天主教を信仰し、一般の人々も惑わされるようになってしまえば、口業を顧みず批判を行なうと述べていたように、このような状況を鑑みて株宏はあえて最晩年に天主教批判をすることになったのだろう。